

アナポリス（注）と「和平プロセス」

2007年11月17日 アシェル・イントレーター

注：アメリカ、メリーランド州の州都アナポリス。11月27日開催予定の中東和平会議が行われる場所。

今月末、アラブとイスラエルの首脳は、次なる一連の「平和交渉」のために会談を行います。この平和プロセスは多くの失望とわずかな勝利に特徴づけられています。この件自体、問題の両側から、イスラエル社会、キリスト社会、そしてイスラム社会からの激しい反応を引き起こします。我々は祈らなければなりません、一体どのように祈ったらよいのでしょうか。

もちろん、我々は「御国が来ますように、御心が天で行われるように、地でも行われますように。」（マタイ6:10）と祈る事ができます。ここでいくつか検討すべきポイントを挙げます：

和平プロセスへの反対意見

平和提案のほとんどが、イスラエル側からの譲歩によるもので、それに対するイスラム国家やパレスチナ側からの譲歩は一切ありません。ここ数年の間、イスラエルは完全にレバノンとガザから撤退しましたが、それは単にハマスとヒズボラからのミサイル攻撃と戦争を助長させる結果となりました。

国際社会あるいはアラブ社会からの、イスラエルに対する約束は守られたためしはほとんどありません。例えば、最近のレバノンとの平和協定には、シリアとイランからのヒズボラ再武装化を防ぐ事が要求されていました。しかし、再武装化は急速に行われ、この合意は踏みにじられました。

もし、より穏健なイスラム政府とイスラエルが協定に調印しても、より過激なイスラム勢力に乗っ取られた場合意味を成さなくなります。これはガザで実際に起こっており、レバノンでも起こりつつあり、エジプトやヨルダンでもその脅威が迫っているのです。

どのような条件であれ、イスラエルの地の所有に関する明らかな聖書的見地に立った権利は、イスラム世界と国際社会から完全に無視されています。この土地は族長達との契約によって与えられたのです。離散地からこの土地への帰還と再定住は、預言者を通して神は何度も約束されています。国際社会は、イスラム教徒による、宗教的な理由での土地所有の主張を受け入れています。聖書的な立場を考慮する意志はありません。

イスラム聖戦の力は世界中で勃興しており、彼らの目標はどんな暴力的手段を用いてもイスラエルを滅ぼす事にあるのです。国際的な聖戦の最終目標を無視した平和交渉は妄想であり、それは第二次世界大戦前にヒトラーをなだめる努力をしたチェンバレンと同じであります。

聖書には、現在の紛争は継続して増加し、イスラエルへの国際社会全体からの攻撃まで続くとしています。(ゼカリヤ 12-14 章) これらの攻撃はイエシュア (イエス) 個人への攻撃として受け止められ、主はその日、イスラエルを攻撃する敵に対して反撃されるのです。

平和プロセスへの賛成意見

聖書の預言には、メシアの再臨と最終戦争の前に、イスラエルの隆盛と平和の時があると述べられています。(エゼキエル 38:10-11、ゼカリヤ 2:4、ヨエル 2 章) 終末戦争は一地方のパレスチナ社会から来るのではなく、むしろその外側にある巨大な国際連合勢力から来ると述べられています。軍事的視点で見ると、イスラエルの生存と存在に対する真の脅威はパレスチナ人からではなく、シリアやイランのようなより大きな国家から来るのです。(かつてはイラクからとも言われていましたが、イラクでの米軍駐留により、差し迫った将来の危機は無効化されています。)

新約聖書には、支配者に対して平和と秩序をもたらすように祈れと命じています。それにより福音を述べ伝えるより良い条件が整うからです。(I テモテ 2:1-6) 平和と和解は聖書の見地から見て望ましいものです。平和への努力が失敗した時、戦争は正当化されがちであります。平和という概念は、メシアの再臨の前にある今の時代において、たとえ制限付で部分的であっても、それは祝福であり、呪いではないのです。

イスラエルと西岸地区(ユダとサマリア)には2百万のパレスチナ人が住んでいます。彼らの公民権のため、解決策を提示すべきであります。イスラエルは、彼らをイスラエル社会の中に組み込みたくない、あるいは組み込む余裕はありません。しかしながら、イスラエルは自国の治安を維持する権利を保持しつつ、パレスチナ人の、日々の生活の自立性も与えなければなりません。

パレスチナ人の人口が多いため、外交的解決のない継続した軍による支配は物理的にも経済的にも受け入れがたいのです。イスラム教徒の出生率が高いため、それぞれの住民の間に境界線をはっきりもうける必要があります。そうしなければ、ユダヤ人が多数を占めるイスラエルの固有性が将来危機にさらされるのです。

穏健なイスラム教徒はどうか？

何人かの人々は、穏健派のイスラム教徒はいないと言っています。私がアラブ・クリスチアンの友

人たちとの会話から、友人たちのほとんどが、イスラム教穏健派は大勢、むしろ大多数がそうであると同意しています。

しかし、穏健派であってもイスラム教徒はイスラム教徒であります。穏健派のイスラム教徒はイスラエルを破壊するためにテロや軍事攻撃を使う事を信じていません。しかし、イスラム教の世界観は聖書の契約、古代と近代の歴史を否定し、ユダヤの神殿の丘地域を、イスラムの「聖なる」地であると見なしています。

穏健派のイスラム教徒はイスラム過激派の行動を抑制する気はない、あるいは抑制する事ができません。彼らの聖戦による暴力に対する「中立性」は、受動的支持となり、暴力を継続させる事になるのです。

霊的な観点から

究極的に、イエシュアだけが中東に平和をもたらすことができます。(ルカ 19:42) 我々は左翼であれ右翼であれ、どんな政治家に対して解決策を求めるべきではありません。しかし、最低でも一時的、そして部分的解決を得るために、政府指導者達が知恵と品位を持った行動が取れるよう祈るべきです。

メシアの体の中で、我々はイエシュアの愛を通した、和解の代替案を提示するよう召命されています。イスラエルのメシアニック・ジューやパレスチナ人アラブ・クリスチャンは、何年もそのような和解を実行に移してきました。世界中のクリスチャンは、イスラエル政府の、強制のない、安全、外交に対する政策決定権を尊重すべきです。最終的には、ここにいる人民、我々の市民、兵士、指導者がその代償を払うのです。

どうか、地域伝道、メシアニック・コングリゲーションの設立、弟子訓練センター、ヘブライ語での預言的な賛美と祈りの集会、そして、貧しい人々への資金援助など、イスラエルで行われている諸活動のためにお祈り下さい。